神奈川県考古学会

考古かながわ

第33号

2005年８月４日

敗戦後の日本考古学と古墳時代研究

北 條 芳 隆（東海大学 文学部教授）

（１）戦後の日本考古学と上高森事件

太平洋戦争の敗戦をきっかけにして、日本の考古学は装いを新たに再出発したという。歴史学界においては、戦前や戦中の日本国内を席巻した、いわゆる皇国史観からの脱却と克服が最重要の課題であったとき、記紀に記された「神代」の実態を相対化するうえで考古学が選ばれた、というのもうなずける。

事実、静岡県登呂遺跡の発掘や群馬県岩宿遺跡の発掘は、敗戦後の日本考古学が一躍脚光を浴びる起点になったに違いない。これらふたつの発掘調査によって「神代」の想定外であったはるか遠い過去の日本列島にも現実には人が住み、神武東征以前に東海地方で稲作が始まっていたことが明らかになったのだから、確かに新たな視点が切り開かれたといえるのであろう。その後は科学的歴史学の一翼をになう学問分野として、日本考古学は戦前のそれと一線を画して発展してきたといわれている。さらに岡山県月の輪古墳の発掘調査のような、研究者と市民・地域住民とが一体となった発掘運動のスタイルも、戦後日本考古学を特徴づける要素だといえようか。同様のスタイルの調査も各地で実践されている。

ところが2000年の11月5日に発覚した上高森事件は、こうした戦後日本考古学の発展のなかから生み出された。年代的関心の焦点は岩宿遺跡の発見の延長上にあって、発掘調査スタイルはいわゆる月の輪型であったことも象徴的である。

この事件が敗戦後から現在にいたるまでの日本考古学において、その順調な発展に水を差しただけであるのなら、ことさら問題視するにはおよばないのかもしれない。当時の新聞報道において関西方面の某古墳時代研究者が語っていたように、日本の先土器・旧石器時代研究の未熟さゆえであると処断するのが正しいのであれば、石器時代研究の見直しだけで済むのかもしれない。学界の主要な部分の礎は盤石であると、また市民からの支持や信頼も揺るぎないものと胸をなでおろすことができるかもしれない。たしかに昨今は、事件の余韻が学界を包む空気の中で急速に薄れているかのようにもみうけられる。

しかし古墳時代を研究する私にとって、学界の内部を広く覆うであろうと思われるこうした処理の仕方や期待感には強い違和感がある。上高森事件をあそこまで深刻化させた背景には、もっと構造的なものがあるに違いない。戦後の日本考古学が目指した方向性の根っこの部分に由来するところがあるように思われてならないのである。なぜか。それは記紀神話の呪縛からの脱却という当初の共通課題が、実際のところはほとんど実現されず、表層部分の塗り替えに終わったという事実を重視するからである。さらにこうした事実をこれまで不問に伏して省みることがなかったという、より一層重大な事実関係に注目するからである。

この点を再吟味するうえで恰好の素材となるのは、戦後の古墳時代研究をリードした小林行雄の業績とその性格である。ふみ込んだ話になるが、しばらくお付き合いいただきたい。

（２）記紀と小林行雄の古墳時代研究

小林行雄の戦後における業績を振り返ってみると、『古事記』や『日本書記』の記載にかんする具体的な分析を伴う論考として「黄泉戸喫」（1949）、「日本上代における乗馬の風習」（1951）、「阿豆那比考」

(1952)、「鉄盾考」(1962)、「神功・応神記の時代」(1965)、「倭の五王の時代」(1966)、「神々の虚像-神話教育と考古学-」(1968) が直ちに検索されてくる。これらの論考は表題からして考古学と記紀との対話であったことがわかるが、これらばかりではない。伝世鏡論や同笵鏡論の骨格部分を表明したことで著名な「古墳の発生の歴史的意義」(1955) をはじめとする、鏡を取り扱った論考のなかでも、しばしば記紀の記載は参照され、考古学的事象の解釈にあたっての判断材料に用いられている。さらに普及書や啓蒙書として位置づけられる『古墳の話』(1959)や『古鏡』(1965) などでも記紀の記事は積極的に紹介され、考古学の立場から解説されているのである。今掲げた諸論考や著書の発表・発行年代をみれば、どこか特定の年代に偏ることはなく、戦後の小林の研究がもっとも活発であった1940年代後半から60年代半ばを通じてのことであったことも確認できる。つまり小林の古墳および古墳時代研究は、記紀との密接不可分の関係を終始維持しながら進展したとみて、さしつかえないのである。

そして改めてこれら諸論考を総合的に読みなおしてみると、小林の古墳および古墳時代研究には次の諸特徴があることに気がつく。まず第１に、記紀の内容になぞらえて考古学資料を解釈するという側面が濃厚であること。第２に、古墳の年代観については津田左右吉にはじまり戦後に引き継がれた資料批判の動向を丹念に参照しつつ、10代の崇神（３世紀末に崩御)、15代の応神（４世紀末に崩御）を定点として採用したうえ、古墳時代の開始期にあたる（と小林が想定した）崇神以降の皇位継承は、基本的に男系世襲制であったとみなしていること。第３に、戦前に記紀の解釈をめぐってとりかわされた議論のなかでしばしば焦点となった、朝鮮半島諸国への進出や拠点的支配など、個別政治事件への関与を慎重に避け、そこに登場する遺物など考古学的事象の問題として置きかえることが可能な部分に限定した考察をおこなっていること。第４に、記紀の基本構造のうち、神代および初代から９代までの、いわゆる帝記的記載を史実とは異なるものとして排除し、具体的にいえば神武東遷の完全否定をおこなったうえで、神代から「欠史８代」までの空白となった部分に「大和弥生文化の成立と発展」なる図式を据えたことである。

このうち第４項目の特徴が前面に押し出された場合には、たしかに記紀神話の呪縛からの解放を高らかに宣言する論考だと受け止められたとしても不思議ではない。さらに第３項目が第４項目と連動して作用すれば、記紀との一定の距離を保ちながら、かつ慎重な配慮と目配せを欠かさず実証的・科学的考察をおこなったものとの評価が下されるに違いない。事実、小林の業績に対する過去から現在までの学界における評価をみれば、おおかたの反応はそうであったことがわかる。そしてこのような評価や高い支持をえたことが、その後の多大な影響力の源泉となったこともたしかなようである。もとより私自身も、今日にいたるまでその影響下から抜けだせないでいる。

しかし改めて注目したいのは、第１項目と第２項目が同時に備わっていることであり、諸項目は相互に有機的つながりをもつことである。これらの点をふまえて総合的に判断すると、小林の記紀に対する一貫した姿勢は、呪縛からの脱却では決してないことがわかる。むしろ古墳時代開始期とされた崇神以降にかんする記紀の信頼性の高さを、考古学の立場から補強する役割を果たしたとみるべきである。また第４項目における神武東征の否定については、戦前からの論争の延長線上にあって、既に唱えられてきた北部九州勢力東遷説への反論だという性格をもつ点も見逃してはならない。この部分は伝世鏡論の提唱として学史の上で語られることが多いのであるが、それは銅鐸文化圏と銅矛文化圏への解釈に終始した段階から抜け出す意図のもと、戦後になって新たに付け加えられた論理でもあった。同笵鏡配布論との抱き合わせとして構想された論理構造の卓抜さと斬新さとがきわだったがために、戦前からの継続性が見えにくくなっただけに過ぎない。

つまり小林行雄の戦後の古墳研究は、戦前からの一貫した姿勢で独自の課題と向き合ったものであり、敗戦を転換点とした思考のゆらぎなどは一切なかったとみるべきである。なおこの点にかんして、とある識者は、考古学的現象の解釈にあたって小林がしばしば記紀を根拠にする姿勢をとらえて「記紀との相克」や葛藤だと理解するが、それは完全な的はずれである。

（3）現在の古墳時代研究と皇国史観

このような小林の業績を基礎として戦後確立された古墳時代像は、当然の帰結として次のようなものとなった。すなわち崇神の代以降は記紀の記載内容を大筋で踏襲したものであり、神代から神武を経て開化にいたるまでの過程は大和地域の弥生文化が担うというものであった。天皇は別世界から日本列島に降臨したのではなく、大和の弥生人のなかから生まれたという図式が確定したのであるが、同時に天皇の一系性は大和の地に刻み込まれる恰好で固定されることになった。筋立ての骨格は王権の確立過程を王権の側から語るものであった。そして、これが現在に至るまでの古墳時代研究を支配する基礎認識（パラダイム）になったのである。

しかし、こうして描かれた古墳時代像のどこが科学的考察の結果なのであろうか。神話を排除し、天皇が人間社会のなかから生まれたという図式に置きかえたことが科学なのであろうか。戦前や戦中の人々を捉えたとされる神話の呪縛力とは、本当にそこまで強固なものだったのであろうか。むしろ否定的な証拠の方が多い。

皇国史観の拠り所となった基礎資料が記紀であることはいうまでもない。同じように現在の古墳時代研究の基本認識の枠組みの拠り所もまた記紀なのであるから、両者はごく近しい、いわば兄弟関係にあることがわかる。つまり国家主義的歴史観として大枠でくくられ、いっぽうは極端な国粋主義的表現形態であり、もういっぽうは日本主義ともいうべき表現形態としての差をもつに過ぎないのである。

こうした歴史観に下支えられた古墳時代研究の枠組みが学問の名を借りて世に流布されつづけてきたのであるから、上高森事件を余所事として処理する資格などないではないか。そう思うのである。

古墳時代研究の本当の意味での戦後的枠組みの構築は、上高森事件を転機として、これからはじまる。

会の活動報告

2005年度総会を開催

さる5月28日（土）、かながわ県民センターにおいて2005年度の総会を開催しました。ここに総会の内容を報告します。

会則に則り、寺田会長を議長に選出した後、以下の議事が総会に諮られました。

議事1　2004年度事業報告
議事2　2004年度収支決算報告
議事3　会則の改正
議事4　会長及び副会長の選出
議事5　役員の改選
議事6　2005年度事業計画（案）
議事7　2005年度収支予算（案）

議事1　2004年度事業報告

【総会】総会を2004年6月12日、かながわ県民センターにて開催。

（役員会・幹事会）2004年5月19日、7月21日、9月29日、11月17日、2005年1月19日、3月16日の合計6回開催。

【会誌】『考古論叢神奈河』第13集を織笠昭さん追悼号として2005年4月に刊行。

【連絡誌】『考古かながわ』30号、31号、32号をそれぞれ8月、12月、3月に刊行。

【講座】2005年2月7日、かながわ県民センターにて「神奈川の横穴墓」と題して開催。
参加者は約100名。

【見学会】県内における発掘調査現場等の見学会として三浦市の海蝕洞穴遺跡（2004年5月30日）、と茅ヶ崎市下寺尾西方遺跡及び七堂伽藍跡（2005年3月5日）の見学会を開催。

【発表会】第28回神奈川県遺跡調査・研究発表会を10月19日に横浜市開港記念会館で開催。

茅ヶ崎市の芹沢大久保C遺跡・D遺跡ほか10地点の調査報告が行われました。また発表会では弥生時代の遺跡と古墳時代の調査報告について、それぞれの時代を専門とする研究者がコメントを行うという初の試みもなされました。

議事2　2004年度収支決算報告

5頁のとおり、2004年度の収支決算が報告され、監事からの会計監査報告が拍手をもって承認されました。

議事3　会則の改正

本会会則のうち、役員の任期について定めた第7条の表現に誤解をまねくような部分があるため、会則の改正が提案され、下記のとおり会則の改正が承認されました。

〔改正前〕

第7条第1項

「役員の任期は一期2年とする。ただし、再任を妨げないものとする。再任の任期は三期6年までとする。ただし、その後、一期2年以上を経れば再任を妨げない。」

〔改正後〕

第７条第１項

「会長及び副会長を除く役員の任期は一期2年とする。ただし、再任を妨げないものとする。再任の任期は三期6年までとする。ただし、その後、一期2年以上を経れば再任を妨げない。」

＿＿＿＿＿＿＿＿が改正部分

議事4　会長及び副会長の選出

2005・2006年度の会長には引き続き寺田兼方さんを、またご本人から退任の申し出のあった副会長・伊東秀吉さんに代わる新たな副会長として岡本孝之さんをそれぞれ推薦し、満場一致で承認されました。

議事5　役員の改選

2004年度をもって現役員の任期が満了となるため、2005・2006年度の会務遂行を担当する役員の改選を行いました。また総会当日、本会の新たな顧問として伊東秀吉さんを推薦する議事を提案し承認されました。総会で選出・承認された役員は、さる6月29日の役員会で以下の役割分担で活動してゆくこととなりました。

（顧　問）小出義治、伊東秀吉
（会　長）寺田兼方
（副会長）岡本孝之
（監　事）伊藤　郭、松尾宣方
（総　務）
　曽根博明、中村若枝、宮坂淳一、小林康幸
（会　誌）
　小滝　勉、依田亮一、佐藤仁彦、滝沢晶子
（連絡誌）
　渡辺　務、秋田かな子、中川真人

新副会長 岡本孝之氏

（講　座）
　大上周三、明石　新、上原正人、小山裕之
（見学会）
　小川裕久、須田英一、田代郁夫、渡辺直哉
（発表会）
　大村浩司、吉田政行、佐々木健策、阿曽正彦

議事6　2005年度事業計画案

【総会】総会は2005年5月28日、かながわ県民センターにて開催。

【役員会・幹事会】6月29日以降、おおむね2ヶ月に1回の間隔で年6回程度の開催を予定。

【会誌】『考古論叢神奈河』第14集を2006年4月に刊行予定。

【連絡誌】『考古かながわ』33号、34号、35号として年3回の刊行を予定。

【講座】2006年2月5日、県民センターにて開催を予定。テーマ未定。

【見学会】例年どおり県内2回、県外1回の合計3回の見学会を開催予定。

【発表会】第29回神奈川県遺跡調査。研究発表会を10月23日に横浜市歴史博物館講堂で開催予定。

⇒7頁 お知らせ 参照

議事7　2005年度収支予算案

5頁のとおり、上記の事業計画案とともに2005年度の収支予算案が審議され、満場一致で拍手により承認されました。

2004年度収支決算

（収入の部）

節	予算額	決算額	比較増減額	説明					
会費	1,140,000	1,224,000	84,000	旧年度会費	3,000	×	71	名＝	213,000
				本年度会費	3,000	×	298	名＝	894,000
				次年度会費	3,000	×	39	名＝	117,000
機関誌等売り上げ	1,000,000	769,980	▲ 230,020	発表会要旨					165,660
				（内訳）21回要旨(会員)	500	×	1	部＝	500
				21回要旨(一般)	1,000	×	1	部＝	1,000
				22回要旨(会員)	700	×	1	部＝	700
				22回要旨(一般)	1,000	×	1	部＝	1,000
				24回要旨(会員)	800	×	1	部＝	800
				24回要旨(一般)	1,500	×	1	部＝	1,500
				26回要旨(会員)	500	×	6	部＝	3,000
				26回要旨(一般)	1,000	×	2	部＝	2,000
				26回要旨(委託0.8)	800	×	1	部＝	800
				26回要旨(委託0.7)	700	×	13	部＝	9,100
				27回要旨(会員)	300	×	8	部＝	2,400
				27回要旨(一般)	1,200	×	9	部＝	10,800
				27回要旨(委託0.8)	960	×	1	部＝	960
				27回要旨(委託0.7)	840	×	15	部＝	12,600
				28回要旨(会員)	300	×	109	部＝	32,700
				28回要旨(一般)	1,300	×	66	部＝	85,800
				考古論叢					311,770
				（内訳）論叢1(会員)	1,800	×	1	部＝	1,800
				論叢1(一般)	2,300	×	2	部＝	4,600
				論叢2(会員)	1,800	×	1	部＝	1,800
				論叢2(委託0.8)	1,840	×	2	部＝	3,680
				論叢2(委託0.7)	1,750	×	2	部＝	3,500
				論叢3(会員)	1,800	×	2	部＝	3,600
				論叢3(一般)	2,500	×	1	部＝	2,500
				論叢3(委託0.7)	1,750	×	1	部＝	1,750
				論叢4(一般)	2,500	×	4	部＝	10,000
				論叢4(委託0.8)	2,000	×	2	部＝	4,000
				論叢5(会員)	1,800	×	1	部＝	1,800
				論叢5(一般)	2,500	×	1	部＝	2,500
				論叢5(委託0.8)	2,000	×	1	部＝	2,000
				論叢5(委託0.7)	1,750	×	1	部＝	1,750
				論叢6(会員)	1,500	×	1	部＝	1,500
				論叢6(一般)	2,500	×	2	部＝	5,000
				論叢6(委託0.8)	2,000	×	1	部＝	2,000
				論叢7(会員)	1,500	×	2	部＝	3,000
				論叢7(一般)	2,500	×	4	部＝	10,000
				論叢7(委託0.8)	2,000	×	1	部＝	2,000
				論叢8(一般)	2,500	×	6	部＝	15,000
				論叢8(委託0.8)	2,000	×	2	部＝	4,000
				論叢9(一般)	2,500	×	5	部＝	12,500
				論叢9(委託0.8)	2,000	×	1	部＝	2,000
				論叢10(会員)	1,500	×	5	部＝	7,500
				論叢10(一般)	2,500	×	5	部＝	12,500
				論叢10(委託0.8)	2,000	×	1	部＝	2,000
				論叢10(委託0.7)	1,750	×	1	部＝	1,750
				論叢11(会員)	1,500	×	1	部＝	1,500
				論叢11(一般)	2,600	×	17	部＝	44,200
				論叢11(委託0.8)	2,080	×	8	部＝	16,640
				論叢11(委託0.7)	1,750	×	4	部＝	7,000
				論叢12(一般)	2,000	×	20	部＝	40,000
				論叢12(委託0.8)	1,600	×	39	部＝	62,400
				論叢12(委託0.7)	1,400	×	10	部＝	14,000
				講座要旨					292,250
				（内訳）講座縄文起源Ⅱ(会員)	700	×	1	部＝	700
				講座縄文起源Ⅱ(一般)	1,000	×	4	部＝	4,000
				講座縄文起源Ⅱ(0.8)	800	×	1	部＝	800
				講座縄文起源Ⅱ(0.7)	700	×	17	部＝	11,900
				講座縄文ムラ(会員)	800	×	2	部＝	1,600
				講座縄文ムラ(一般)	1,000	×	3	部＝	3,000
				講座縄文ムラ(委託0.8)	800	×	2	部＝	1,600
				講座縄文ムラ(委託0.7)	700	×	33	部＝	23,100
				講座寺院(会員)	500	×	4	部＝	2,000
				講座寺院(一般)	1,500	×	1	部＝	1,500
				講座寺院(委託0.8)	1,200	×	2	部＝	2,400
				講座寺院成果(一般)	1,500	×	5	部＝	7,500
				講座寺院成果(委託0.7)	1,050	×	18	部＝	18,900
				講座学史(会員)	500	×	9	部＝	4,500
				講座学史(一般)	1,500	×	14	部＝	21,000
				講座学史(委託0.8)	1,200	×	1	部＝	1,200
				講座近世(会員)	500	×	17	部＝	8,500
				講座近世(一般)	1,500	×	11	部＝	16,500
				講座近世(委託0.8)	1,200	×	47	部＝	56,400
				講座近世(委託0.7)	1,050	×	19	部＝	19,950
				講座横穴(会員)	400	×	63	部＝	25,200
				講座横穴(一般)	1,200	×	30	部＝	36,000
				講座横穴(委託0.8)	960	×	25	部＝	24,000
				トピックス					300
				（内訳）トピックス2000	100	×	3	部＝	300
雑収入	10,000	15,484	5,484	見学会参加費/預金利子/懇親会残り/他					15,484
繰越金	1,086,874	1,086,874	0	前年度繰越金					1,086,874
合計	3,236,874	3,096,338	▲ 140,536						

（支出の部）

節	予算額	決算額	比較増減額	説明	
事務局費	209,000	153,582	▲ 55,418	連絡費	98,297
				会議費	15,960
				行事開催費	20,150
				賃金	0
				会費振込手数	19,175
会誌費	931,000	650,560	▲ 280,440	連絡費	9,755
				会議費	1,080
				印刷費	634,725
				謝礼	5,000
連絡誌費	271,000	237,065	▲ 33,935	連絡費	123,665
				印刷費	113,400
				謝礼	0
発表会費	421,000	300,807	▲ 120,193	連絡費	21,178
				会議費	0
				行事開催費	29,729
				印刷費	249,900
				謝礼	0
講座費	480,000	337,767	▲ 142,233	連絡費	13,350
				会議費	0
				行事開催費	83,127
				印刷費	241,290
				謝礼	0
見学会費	95,000	86,613	▲ 8,387	連絡費	79,713
				会議費	4,800
				行事開催費	2,100
				謝礼	0
予備費	829,874	0	▲ 829,874		0
合計	3,236,874	1,766,394	▲ 1,470,480		

＊収入(3,09,6338円)－支出(1,766,394円)＝次年度繰越金(1,329,944円)

会計監査報告

2004年度の収支決算について、金銭出納簿、証拠書類等を精査し、預金残高と照会した結果、誤りなく適正に処理されていることを確認しました。

2005年5月6日

幹事　市川 規平　　印

伊藤　郭　　印

2005年度の収支予算案

（収入の部）

節	予算額	前年度予算額	比較増減額	説明				
会費	1,140,000	1,119,000	21,000	会費	3,000	×	380 名＝	1,140,000
機関誌等売り上げ	1,000,000	1,101,460	▲ 101,460	発表会要旨・考古論叢・講座要旨等売り上げ				
雑収入	10,000	10,000	0	見学会参加費/預金利子/親睦会残り/他				
繰越金	1,086,874	1,571,089	▲ 484,215	前年度繰越金				
合計	3,236,874	3,801,549	▲ 564,675					

（支出の部）

節	予算額	前年度予算額	比較増減額	説明		備考
事務局費	209,000	360,000	▲ 151,000	連絡費	150,000	連絡誌の発送費等を「連絡誌費」へ組み替え
				会議費	16,000	
				行事開催費	24,000	
				会費振込手数料	19,000	
会誌費	931,000	935,000	▲ 4,000	連絡費	15,000	
				会議費	1,000	
				印刷費	910,000	発送費を含める
				謝礼	5,000	
連絡誌費	271,000	130,500	140,500	連絡費	150,000	連絡誌の発送費等を「事務局費」から組み入れ
				会議費	1,000	
				印刷費	120,000	
発表会費	421,000	468,000	▲ 47,000	連絡費	20,000	
				会議費	1,000	
				行事開催費	100,000	
				印刷費	280,000	
				謝礼	20,000	
講座費	480,000	495,000	▲ 15,000	連絡費	5,000	
				会議費	5,000	
				行事開催費	100,000	
				印刷費	350,000	
				謝礼	20,000	
見学会費	95,000	90,000	5,000	連絡費	80,000	参加費を徴収する催しについては予算計上しない
				会議費	2,000	
				行事開催費	3,000	
				謝礼	10,000	
予備費	829,874	1,323,049	▲ 493,175		21,000	
合計	3,236,874	3,801,549	▲ 564,675			

今年度も会員の皆様のご期待に応えられるよう、役員一同、努力して会務の遂行に邁進する所存です。

皆様のご支援、ご協力よろしくお願いいたします。

演会「武家の古都鎌倉」を開催

総会の議事終了後、毎年恒例となったかながわ考古トピックスにかえて、本年度は講演会を開催しました。講師に鎌倉市世界遺産登録推進担当の玉林美男さんをお迎えし、「武家の古都鎌倉～世界遺産登録にむけた取り組み～」と題する講演をしていただきました。

講演では世界遺産とはどういったものかというお話に始まり、現在の日本国内における世界遺産登録の状況の説明に引き続き、鎌倉市の世界遺産登録へ向けた取り組み状況についてのお話がされました。（以下、講演の要旨を抜粋）

鎌倉は源頼朝が我が国で初めての武家政権を樹立した地であり、以後、江戸時代が終わりを迎えるまで約700年にわたる武家政権の基礎となった日本の歴史上、重要な意味をもつ場所であります。こうした武家政権の都市としての姿が、多くの歴史的遺産となって今も遺されている状

況は後に近・現代の首都東京へと発展した江戸には残念ながら見ることが出来ません。

したがって「武家の古都鎌倉」という歴史的な意味付けが世界に誇るべき日本の文化遺産として大きな価値を持つことになるのです。鎌倉の歴史遺産が有する最大の特徴は、その独自の都市構造にあると言えます。南を海、東・西・北の三方を山に囲まれた特徴的な地形は天然の要害となり、さらにその内側では谷戸部に人工的な開発が施され、切岸によって造成された雛壇状の地形を利用して寺院、神社、武家屋敷が建てられ、こうした谷戸を中心に都市が発展しました。

都市鎌倉には武家が重んじた信仰の空間が生まれ、今に受け継がれる武家文化が醸成されました。ここから生まれた精神、文化、習慣、制度は今日の日本人の心の中に少なからず受け継がれているものとも言えるでしょう。

配布されたパンフレット

(^.^)　お知らせ　(^.^)

『考古論叢神奈河』の送付について

神奈川県考古学会は会員の皆様に納めていただく会費を主たる財源として活動をしています。以前より会員の皆様が納められた会費に満足いただけるよう、十分な情報の提供をめざしてまいりました。

そうした具体的な取り組みの一つとして、2003年度から会費を納めた方には、従来、実費でご購入いただいておりました会誌『考古論叢神奈河』を無償でお送りすることとし、第12集から実施しています。

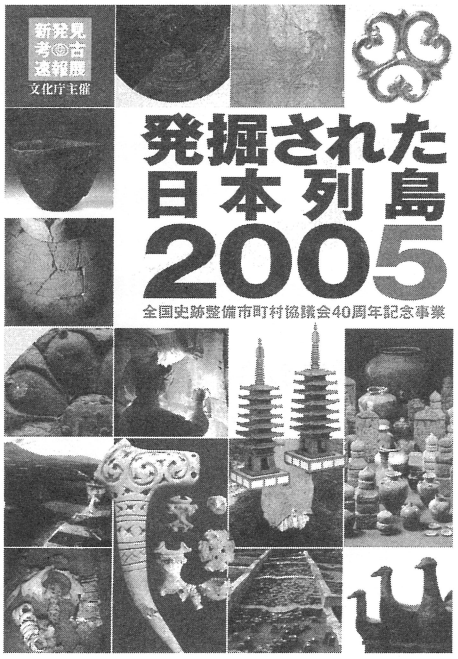
例年、会費の納付書をお送りするのが新年度を迎える前の2～3月頃となっており、会員の多くの方がこの時期に会費を納入されています。おおむね12月頃を基準日として会費の納入状況を確認し、会計年度末（3月）にやや遅れる4月の会誌刊行時に皆様のお手元に会誌をお送りすることとしています。このため、事務処理の都合上、納入状況確認と納入が前後してしまった方には会誌をお送り出来ません。

そのような場合は、5月の総会、10月の遺跡発表会及び2月の講座が開催される時に会場受付にお申し出いただき、その場でお手渡しする方法となります。

ご理解の程、よろしくお願いいたします。

総務担当：小林康幸

***



～「列島展」へお出かけください～

同封の招待券で全国話題の考古資料に接してみよう！

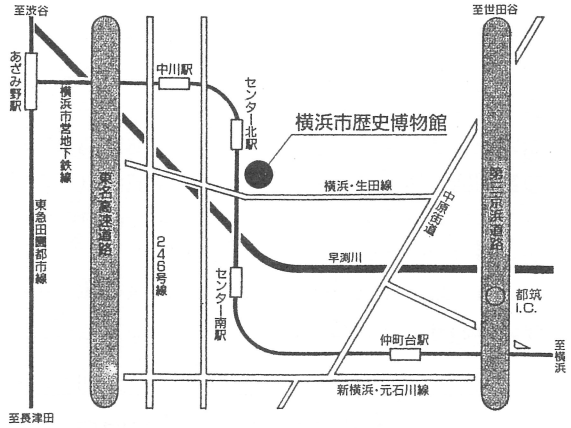
第29回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 開催予告

日　時：平成17年10月23日(日)　9:30～16:45／会　場：横浜市歴史博物館 講堂

交　通：横浜市営地下鉄「センター北駅」1番出口から徒歩5分（地図参照↓）

時間	発表	概要	発表者
9:30～9:55	1. 秦野市 平沢同明遺跡	学史に著名な縄文～弥生の遺跡	玉川文化財研究所　戸田哲也氏
9:55～10:10	平沢同明遺跡の発表に関するコメント		神奈川県教育委員会　谷口　肇氏
10:10～10:35	2. 横須賀市 北門古墳群	埴輪が出土した古墳の調査	盤古堂　滝沢　亮氏
10:35～11:30	講演　横浜市大塚・歳勝土遺跡の調査研究・保存について		横浜市立大学　小宮恒雄氏
11:30～12:30	大塚・歳勝土遺跡の見学会（解説付き）		
12:30～13:30	*** 昼　休　み　※館内の展示等をご観覧ください ***		
13:30～13:55	3. 海老名市 相模国分寺	史跡整備に伴う調査の集大成	国士舘大学　須田　勉氏
13:55～14:20	4. 川崎市 推定橘樹郡衙遺跡	数年間にわたる確認調査の成果	玉川文化財研究所　河合英夫氏
14:20～14:35	推定橘樹郡衙の発表に関するコメント		藤沢市教育委員会　荒井秀規氏
14:35～15:00	5. 平塚市 坪ノ内遺跡	古代大型建物址と中世墓	かながわ考古学財団　柏木善治氏
15:00～15:15	*** 15 分 間 休 憩 ***		
15:15～15:40	6. 鎌倉市 北条義時法華堂跡	北条義時の墓所	松尾宣方氏
15:40～16:05	7. 津久井町 津久井城	中世津久井城調査の全容	東海大学　近藤英夫氏
16:05～16:30	8. 小田原市 三の丸元蔵堀	中・近世障子堀の調査	玉川文化財研究所　吉田浩明氏

発表会担当：大村浩司・吉田政行・佐々木健策・阿曽正彦



『考古論叢神奈河』原稿の募集

『考古論叢神奈河』は皆さんで育てる会誌です。

☆考古学会に衝撃を与えるような論文

☆研究ノートや身近な資料紹介

☆どちらも大歓迎！

次号第14集の締切りは2005年12月中旬を予定。お気軽に、ふるってご投稿ください。

会誌担当：依田亮一・小滝 勉・佐藤仁彦・滝沢晶子

問い合わせ：滝沢（株）博通 0467-25-6023まで

見学会予告！

調査中の**海老名市相模国分寺**の見学会を予定しております。

日程等は改めてご連絡します。ふるってご参加下さい。

見学会担当　小川裕久・須田英一・田代郁夫・渡辺直哉

『考古かながわ』原稿の募集

本誌も次号の原稿を募集中です。会主催の行事参加録や感想文、会へのご意見などお寄せください。

連絡誌担当：秋田かな子・中川真人・渡辺　務

問い合わせ：秋田 東海大学 0463-50-2419まで

＼(^o^)／ 催し物情報 2005年8月～12月

＊展示会＊

～横浜市歴史博物館～

★夏休み企画展「おなかがすいた はらぺこだっ！
ー縄文時代のごはんー」

★テーマ展示「武具と刀剣」(仮題)

会　　期：9月17日(土)～10月10日(月)
会　　場：横浜市都筑区中川中央1-18-1
問い合わせ：同館　045-912-7777

～神奈川県立歴史博物館～

★特別展「中世東国の熊野信仰」

会　　期：10月8日(土)～11月20日(日)
会　　場：横浜市中区南仲通5-60
問い合わせ：同館　045-201-0926

～神奈川県立埋蔵文化財センター～

★企画展 かながわの遺跡展「武家の古都・鎌倉
ー発掘された中世の世界ー」(仮題)

会　　期：10月3日(月)～28日(金)
会　　場：横浜市南区中村町3-191-1／3階展示室
問い合わせ：同センター　045-252-8661
同巡回展は**秦野市立桜土手古墳展示館**にて、
11月30日(水)～12月18日(日)開催。
会　　場：神奈川県秦野市堀山下380-3
問い合わせ：同館　0463-87-5542

～小田原市かもめ図書館～

★「最新出土品展2005」

会　　期：11月2日(水)～16日(水)
会　　場：小田原市南鴨宮1-5-30
問い合わせ：小田原市教育委員会 0465-33-1718

～秦野市文化会館～

★文化財資料展「波多野氏と実朝」

会　　期：11月17日(木)～23日(水)
会　　場：神奈川県秦野市平沢82／展示室
問い合わせ：秦野市教育委員会文化財班 0463-87-9581

＊講座＊

☆かながわ考古学財団　考古学講座・第4回

日　　時：9月25日(日)13:30～15:45
講　　師：鈴木次郎（(財)かながわ考古学財団）
テ　ー　マ：第1部「氷河時代最寒冷期のかながわ」
講　　師：柏木善治（(財) かながわ考古学財団）
テ　ー　マ：第2部「相模における古墳時代の終焉」
会　　場：かながわ県民センター／２階ホール
※応募受付期間　８月９日～９月９日
問い合わせ：(財)かながわ考古学財団資料活用課
045-252-8661

☆平塚市博物館 考古学入門講座「集落」

日　　時：10月8･22日、11月5･19日の(土)
会　　場：平塚市浅間町12-41　同館／講堂
定　　員：100名
問い合わせ：同館　0463-33-5111

＊発表会・シンポジウム＊

○第15回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会

日　　時：8月21日（土）10:00～15:00
講　　演：「貝化石が語る鎌倉市街地の縄文の海」
松島義章氏
会　　場：鎌倉生涯学習センターホール 入場無料
問い合わせ：鎌倉市教育委員会文化財課
0467-23-3000 内線2469

○小田原市 シンポジウム「よみがえる馬出し門」

日　　時：9月3日（土）10:00～16:30
記念講演：小和田哲男氏
問い合わせ：小田原市教育委員会 0465-33-1718

○東田原中丸遺跡調査報告（予告）

日　　時：11月19日（土）午前～
会　　場：秦野市文化会館 小ホール 入場無料
問い合わせ：秦野市教育委員会文化財班 0463-87-9581

○かながわ考古学財団 発掘調査成果発表会／公開セミナー

日　　時：11月26日（土）9:15～10:40／11:00～16:50
会　　場：港南区民文化センターひまわりの郷 ホール
内　　容：第Ⅰ部　平成16年度の発掘調査成果発表
第Ⅱ部　公開セミナー「南関東をとりまく
縄文時代の交流」*4名による事例報告と討論
問い合わせ：同財団資料活用課 045-252-8661

○平成17年度　小田原市遺跡調査発表会

日　　時：11月6日(土)10:00～16:30
会　　場：小田原市かもめ図書館
問い合わせ：小田原市教育委員会　0465-33-1718

○第16回　茅ケ崎市遺跡調査展示･発表会（予告）

日　　時：発表会 12月11日(日)10:00～16:30
展　　示 12月10日(土)～16日(金)
会　　場：茅ケ崎市民文化会館 小ホール　入場無料
問い合わせ：茅ケ崎市教育委員会　0467-82-1111
内線3343

考古かながわ　第33号

発　行　神奈川県考古学会
発行日　2005年８月４日
編集者　秋田かな子・中川真人・渡辺　務
(連絡誌担当)
印　刷　(有)湘南グッド
発行者　神奈川県考古学会会長　寺田兼方
〒251-0043
藤沢市辻堂元町4-17-4 弥生荘102
郵便振替　00240-9-71208